

TEI による『篆隸万象名義』と原本『玉篇』の構造化記述における問題点

李 媛¹

要 旨

近年、Unicode の普及に伴い、東アジア文献研究のテキストデータ構築にも、欧米発の TEI (Text Encoding Initiative) の影響が広がっている。しかし、東アジア文献はその独特な構造が多く、欧米の文献と比較すると特有の課題を抱えている。TEI の規則や文法に精通する専門家でも、東アジア文献の構造に詳しくなければ、適切な提案が難しいところがある。筆者は日本古辞書とその先行する中国字書を研究対象としており、これまで何度か日本古辞書の TEI による記述構造化の試みを行ったが、主に部分的なサンプリングの検討に留まった。しかし、これらの古辞書の全体構造や独特な構造を理解し、各々の古辞書に適した TEI 記述の全体像を掴むことが重要である。本稿では、日本で現存する最古の漢字字書『篆隸万象名義』およびその先行文献である中国の原本『玉篇』を取り上げ、その構造化記述における問題点を整理する。筆者の学習と理解の範囲内で TEI データを作成し、これがさらなる議論や検討の一助となることを期待している。

Issues in the Structured Description of TenreiBanshoMeigi and Its Original Yupian Using TEI

Abstract

In recent years, with the widespread adoption of Unicode, the influence of the Western-originated TEI (Text Encoding Initiative) has expanded into the construction of text data for East Asian literature studies. However, East Asian literature often has unique structures, presenting specific challenges compared to Western literature. Even experts familiar with TEI rules and grammar may find it difficult to make appropriate suggestions without a deep understanding of East Asian literature's structure. The author focuses on the study of early Japanese dictionaries and their preceding Chinese dictionaries. Although there have been several attempts to structurally describe ancient Japanese dictionaries using TEI by the author, these efforts have primarily involved partial sampling examinations. It is crucial to understand the overall structure and unique characteristics of these ancient dictionaries and grasp an overall picture of TEI descriptions suited to each dictionary. This paper takes up the oldest existing Chinese character dictionary in Japan, TenreiBanshoMeigi, and its preceding Chinese original, Yupian, to organize the issues in their structured descriptions. The author has created TEI data within the scope of their study and understanding, hoping this will contribute to further discussion and examination.

1 はじめに

¹ LI Yuan, 京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター

『篆隸万象名義』は比較的シンプルな構造を持っている。日本の古辞書は通常、漢字の形・音・義の三要素に加え、対応する和訓も記載されている。『篆隸万象名義』は平安時代初期に成立し、現存する最古の漢字字書として、日本古辞書の原点とも言える。この辞書は日本における辞書の「日本化」の始まりを示しており、収められた意味注記（単字注および漢文節による注記）は後世の日本古辞書で対応の和訓に置き換えられる例が多く見られる。

『篆隸万象名義』は、その編纂時に藍本とされた原本『玉篇』と共に、後世の日本古辞書に多大な影響を与えた。しかし、『篆隸万象名義』の伝承本である高山寺本は、早くから誤写や誤脱が多いとされ、原本『玉篇』の内容を基にした簡略化された漢字字書であるため、中国南北朝時代の字形・字体情報も含まれている。このような複雑な要素が集約された文献として、どのように構造化記述を行うかは重要な課題である。

さらに、原本『玉篇』は中国南北朝時代の梁の大同九年（543年）に成立した部首分類体系を持つ豊富な典拠や用例を含む漢字字書である。この原本『玉篇』は『篆隸万象名義』よりもさらに複雑な項目構造を持っている。本稿では『篆隸万象名義』と原本『玉篇』に関する構造化記述の問題点を整理し、古辞書研究に携わる者として、学習と理解した範囲内で TEI データを作成し、これがさらなる議論や検討の一助となることを期待している。

2 先行研究

古辞書の構造化記述に関する研究は、これまで筆者を含め複数の研究者によって行われてきた。申（2016）、劉ほか（2017）、藤本ほか（2018）、申（2018）、岡田（2020）、岡田（2022）、李（2022）、李（2024）などが挙げられる。特に劉ほか（2017）や藤本ほか（2018）は独自システムを用いた構造化記述に関する研究であり、その手法や内容は参考になる。

申（2018）は、『類聚名義抄』の構造化を検討した研究であり、申（2016）を基に改訂されたものである。岡田（2022）は、古辞書である典型的な翻刻・符号化が難しい文献に対して、『篆隸万象名義』、図書寮本『類聚名義抄』、『色葉字類抄』および『康熙字典』の実例を取り上げ、妥当な統一的な符号化モデルを提示した研究で、岡田（2020）を書き改めたものである。これは TEI に基づく日本古辞書の効率的な符号化モデルに関する論考は大いに参考になる。しかし、複数の古辞書を横断して妥当な統一的な符号化モデルを提示するため、各古辞書の構造や特徴を網羅的に論じるものではない。

筆者が行ってきた李（2018・2022・2024）の研究では、玉篇系字書の三書である原本『玉篇』、『篆隸万象名義』、宋本『玉篇』を対象に、主として TEI P5 辞書モジュールの範囲内で検討を進め、TEI Lex-0 のスキーマも参考に試みたが、主に部分的なサンプリングの検討に留まった。古辞書の全体構造や独特な構造を理解し、各々の古辞書に適した TEI 記述の全体像を掴むことが重要であると感じている。本稿では、日本で現存す

る最古の漢字字書『篆隸万象名義』およびその先行文献である中国の原本『玉篇』を取り上げ、その構造化記述における問題点を整理する。

また、TEI に関しては、2022 年刊の『人文学のためのテキストデータ構築入門：TEI ガイドラインに準拠した取り組みに向けて』が概説編、実践編、事例編を通じて詳細に紹介され、非常に参考になった。

3 対象資料のテキストデータ

筆者が所属していた北海道大学大学院文学研究院言語科学講座の池田研究室では、「平安時代漢字字書総合データベース (HDIC)」の構築プロジェクトを推進していた。

HDIC は古辞書の翻刻・入力作業を効率化するために、まず宋本『玉篇』をデータ化し、そのデータを基に高山寺本『篆隸万象名義』の入力作業も行った。2016 年 4 月には宋本『玉篇』の全文テキストデータを、続いて 9 月には『篆隸万象名義』の全文テキストデータを順次公開した。また、原本『玉篇』の残巻全文テキストも構築済みであるが、校正などの関係で現在は内部利用に限られている。本研究では、HDIC が公開しているテキストデータを活用する。

4 構造化記述の目指している目標

古辞書の構造化記述が目指している目標はどのようなものであるか、また、どの程度の深さで古辞書のテキストデータを構築したいのかが重要である。各研究者が独自の研究目的に基づき、異なる要求を持っている。特に『人文学のためのテキストデータ構築入門：TEI ガイドラインに準拠した取り組みにむけて』の第 1 章「人文学のためのテキストデータの構築とは」では、「テキストデータ構築の深さ」を次の 2 点から評価することを示している。

- ・どのような人のどのようなニーズを主要な対象とするか
- ・どれくらいの手間暇をかけられるか

さらに、TEI ガイドラインを定めている TEI 協会の図書館分科会が提供している Best Practices for TEI in Libraries というルールを紹介し、テキストデータへのタグ付け（符号化、encoding）のレベルを次のように 5 段階に分けて整理すると紹介している。

- Level 1: OCR によって自動生成されたテキストにそのまま自動化可能な範囲でタグ付け
- Level 2: 最小限のテキストの構造をタグ付け
- Level 3: 内容に関するごく簡単な整理も含むタグ付け
- Level 4: 内容に関する基本的な整理・分析を含むタグ付け
- Level 5: 学術編集のためのタグ付け

テキストデータベースが目指す「深さ」を決定することが重要であり、筆者が推進する古辞書のテキストデータのタグ付けは、この Level 5 に該当する。しかし、「学術編集のための」と一口に言っても、研究者各自がそれぞれの研究目的に沿った考えを持って

いる。

筆者は『篆隸万象名義』と原本『玉篇』に記録された掲出字システムや掲出字項目の構造を詳細に記述し、漢字の字形・字音・字義に関する情報を詳しくマークアップすることを目標にしている。これにより、反切用字や義注内容、注文内容の順番などを抽出できるようになることを望んでいる。ただし、作業を進める中で、初めから完璧なマークアップテキストデータを目指すのではなく、問題点を徐々に明らかにし、大枠を作成した後に段階的に詳細を追加し、徐々に目標に近づけていくことが現実的であると認識している。

『篆隸万象名義』のテキストデータはかなり校訂されており、項目構造も比較的シンプルであるため、構造化記述作業を進めやすい面がある。一方で、原本『玉篇』の内容はより複雑で、テキストの校正も不確かなため、項目構造の分析や関連する研究成果を参照・取り入れる必要がある。したがって、構造化記述作業を進めるためには、まずその枠組みを確立することが重要である。

5 篆隸万象名義の構造化記述する際の問題点

漢字字書として、収録される漢字の字形・字音・字義の説明が主要な内容となるが、古い辞書であるため、近現代の辞書と比較して一貫した明示的な凡例や構造が欠けていることが多い。このような特徴をまず整理し、TEIでのマークアップ方法について議論を進めるための前提を整えることが重要である。まず、『篆隸万象名義』の基本的な項目構造を確認し、その内容に基づき、項目の分類や特徴を把握する。

5.1 篆隸万象名義の項目構造²

篆隸万象名義における最も標準的な項目構造が図1の示す内容になる。掲出字、反切、意味注記は、それぞれ形、音、義を解釈する役割を担う。

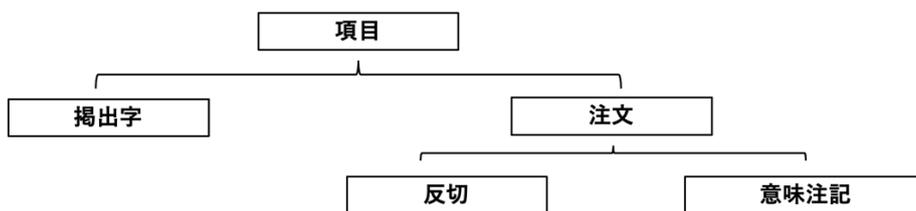


図1 篆隸万象名義の最も一般的な項目構造

例1 官 古完反。職位也、事也、法也、君也。(『篆隸万象名義』 第3帖65丁表 宀部)

² 李 (2015a) (2015b)、李・池田 (2016) の内容に基づき、『篆隸万象名義』の項目構造および掲出字の分類等について説明する。李 (2023) も併せて参照されたい。

例1の掲出字「官」では、掲出字自体がその字形を示している。注文では、反切「古完反」によって字音を注記し、意味注記「職位也、事也、法也、君也。」でその字義を説明している。

上記の図1で示した最も一般的な項目構造以外にも、図2で示すような補助部分を含む項目構造が確認できる。

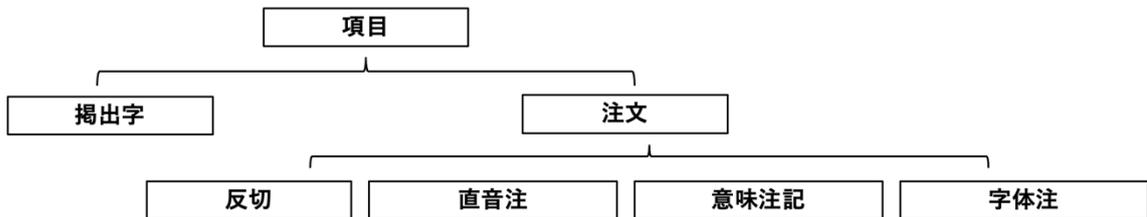


図2 篆隸万象名義における項目構造（補助部分も含む）

例2 誑 俱放反。欺也、誤也。愆字。（『篆隸万象名義』 第3帖13丁裏 言部）

例3 樨 下瓜反。皮可飭弓。音華。（『篆隸万象名義』 第4帖25丁表 木部）

例2における掲出字「誑」は、掲出字自体がその字形を示すが、字体注記「愆字」によってその字形に関する説明が補助される。注文では、反切「俱放反」により字音が注記され、「欺也、誤也」という意味注記によりその字義が説明される。

例3における掲出字「樨」も、掲出字自体がその字形を示す。注文では、反切「下瓜反」により字音が注記されるが、直音注「音華」がその字音に関する説明をさらに補助する。「皮可飭弓」という意味注記によりその字義が説明される。

5.2 掲出字

・掲出字の分類

篆隸万象名義における掲出字の分類は、掲出字及びそれに対応する項目の状況が複雑であるため、一律の原則でマークアップすることが困難である。篆隸万象名義は、その名が示すように、本来は篆書と隸書で表される掲出字が中心であるべきだが、現存する高山寺本においては篆書掲出字が約6%しか存在せず、隸書掲出字が主なものとなっている。

高山寺本の書写過程で掲出字の脱落、誤写、重出、また掲出字が注文に繰り込まれるといった問題が生じている。これに対処するため、大字で掲げられる掲出字だけでなく、脱落した掲出字（脱字）や注文に繰り込まれる掲出字（埋字）も考慮に入れる必要がある。

この点を考慮して、篆隸万象名義の掲出字は以下の三つの基本分類に整理される：

隸書掲出字（約 88%）・埋字（約 4%）・脱字（約 3%）の三つを基本の分類とする³。

これに篆書か隸書かの情報を加えて掲出字の下位分類を行った。

これらの分類を次のように説明した。

Entry_type

Group a – Regular headword	Group b – Embedded headword	Group c – Omitted headword
1 Regular (=Regular_clerical)	3 Embedded_clerical	6 Omitted
2 Regular_seal	4 Embedded_omitted	7 Omitted_regular
	5 Embedded_seal	

Group a には、基本的に篆隸万象名義で隸書大字で掲げられる掲出字が含まれている。そのため、英語表記は「Regular headword」とされた。篆書掲出字の有無によって 2 種類に分類し、書体情報を付加情報として加えた。

1. 「Regular_clerical」は隸書掲出字のみのものを指す。
2. 「Regular_seal」は篆書掲出字も併存するものを指す。

隸書は、通常は「clerical」とすべきだが、最も一般的な掲出字タイプであるため、書体情報を省略して「Regular」とした。

Group b には、基本的に篆隸万象名義で注文に繰り込まれる掲出字(埋字)が含まれる。そのため、英語表記は「Embedded headword」とされ、さらに書体情報が付加され、篆書は「seal」、隸書は「clerical」とされた。埋字が脱落した場合は「omitted」と注記される。

3. 「Embedded_clerical」は隸書で示される埋字を指す。
4. 「Embedded_omitted」は掲出字が脱落した埋字を指す。
5. 「Embedded_seal」は篆書で示される埋字を指す。

Group c には、基本的に篆隸万象名義で脱落した掲出字(脱字)が含まれる。そのため、英語表記は「Omitted headword」とされる。掲出字のみが脱落する場合は「regular」と注記される。

6. 「Omitted」は文献に本文が存在し、元来篆隸万象名義にも存在したと考えられる掲出字を指す。
7. 「Omitted_regular」は掲出字のみが脱落した(注文存)掲出字を指す。

³ HDIC が公開した篆隸万象名義のテキストデータには、補足的な分類として、宋本玉篇に増補された異体字（約 5%）を含む Group d が存在するが、この論文の主旨とは関連が薄いため、本稿では詳細には触れない。これに関する詳細は李・池田（2016）で確認できる。

・ 掲出分類の実例と TEI データ

1 Regular_clerical (隷書掲出字のみのもの)

例 4 惜 胥之反。痛也、愛也、貪也。(『篆隸万象名義』 第 2 帖 89 丁表)



図 3 惜

```
<entry xml:id="2_089_A42" type="Regular">
  <form>
    <orth>惜</orth>
  </form>
  <hom xml:id="2_089_A42">
    <form>
      <pron type="fanqie">胥之反。</pron>
    </form>
    <sense>
      <def xml:id="2_089_A42_sense1">痛也、</def>
    </sense>
    <sense>
      <def xml:id="2_089_A42_sense2">愛也、</def>
    </sense>
    <sense>
      <def xml:id="2_089_A42_sense3">貪也。</def>
    </sense>
  </hom>
</entry>
```

2 Regular_seal (篆書掲出字も併存するもの)

例 5 「玫の篆書」玫 居柳反。黑色石也。(『篆隸万象名義』 第 1 帖 27 丁裏)



図 4 玫

```
<entry xml:id="1_027_B31" type="Regular_seal">
  <form>
    <orth style="seal">玫 seal</orth>
    <orth>玫</orth>
  </form>
  <hom xml:id="1_027_B31">
    <form>
      <pron type="fanqie">居柳反。</pron>
    </form>
    <sense>
      <def xml:id="1_027_B31_sense1">
        黑色石也。
      </def>
    </sense>
  </hom>
</entry>
```

3 Embedded_clerical (隸書で示す埋字)

例6 邠 黒言反。(『篆隸万象名義』 第1帖 48 丁裏)



図5 邠

```
<entry xml:id="1_048_B34" type="Embedded_clerical">
  <form>
    <orth>邠</orth>
  </form>
  <hom xml:id="1_048_B34">
    <form>
      <pron type="fanqie">黒言反。</pron>
    </form>
    <sense>
      <def xml:id="1_048_B34_sense1">
        null
      </def>
    </sense>
  </hom>
</entry>
```

4 Embedded_omitted (見出しが脱落した埋字)

例7 璵β (空白): 古文 (近世写本を確認する)(『篆隸万象名義』 第1帖 21 丁裏)

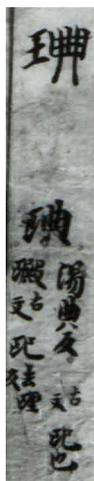


図6 璵

```
<entry xml:id="1_021_B611" type="Embedded_omitted">
  <form>
    <orth style="omitted">璵β</orth>
  </form>
  <hom xml:id="1_021_B611">
    <form>
      <pron type="fanqie">null</pron>
    </form>
    <sense>
      <variant xml:id="1_021_B611_variant1">
        古文
      </variant>
    </sense>
  </hom>
</entry>
```

5 Embedded_seal (篆書で示す埋字)

例 8 琿 琿(seal): 古文。(『篆隸万象名義』 第 1 帖 28 丁表)



図 7 琿

```

<entry xml:id="1_028_A53" type="Embedded_seal">
  <form>
    <orth style="seal">琿(seal)</orth>
  </form>
  <hom xml:id="1_028_A53">
    <form>
      <pron type="fanqie">null</pron>
    </form>
    <sense>
      <variant xml:id="1_028_A53_variant1">
        古文
      </variant>
    </sense>
  </hom>
</entry>

```

6 Omitted (諸文献に本文が存し、元来篆隸万象名義にもあったと考えられる掲出字)

例 9 田 (『篆隸万象名義』 第 1 帖 38 丁表)



図 8 田

```

<entry xml:id="1_038_A413" type="Omitted">
  <form>
    <orth style="Omitted">田</orth>
  </form>
</entry>

```

7 Omitted_regular (掲出字のみ脱落 [注文存] した掲出字)

例 10 喘 充兗反。轉也、疾息也。(『篆隸万象名義』 第 2 帖 10 丁裏)



図 9 喘

```
<entry xml:id="2_010_B11" type="Omitted_seal">
  <form>
    <orth style="seal">喘 seal</orth>
    <orth cotent="omitted">喘</orth>
  </form>
  <hom xml:id="2_010_B11">
    <form>
      <pron type="fanqie">充兗反。</pron>
    </form>
    <sense>
      <def xml:id="2_010_B11_sense1">轉也、</def>
    </sense>
    <sense>
      <def xml:id="2_010_B11_sense2">疾息也。</def>
    </sense>
  </hom>
</entry>
```

5.3 字音注記

『篆隸万象名義』では、主に反切を用いて字音を注記している。原本『玉篇』で反切が二つまたは三つ記されている場合、『篆隸万象名義』では一つの反切のみを採用することが多く、これが全項目の約 98%を占めている。しかし、二つ以上の反切が注記されている項目も存在し、池田 (2020) の調査によれば、その数は 221 例に上る。また、反切以外にも、少数ではあるが「直音注」による字音注記も見られ、形式的に「○音」と示されている項目は約 40 例ある。これら異なる形式の字音注記については、形式ごとに TEI を用いた構造化記述が必要であると考えられる。これらについて、次に具体的な実例を用いて詳しく説明する。

・一つの反切

上述した通り、一つの反切を用いる形式が最も一般的な用例である。次の例 11 で、その形式を確認できる。

例 11 免 靡蹇反。攻也、脱也、去也、歸也、自止也。(『篆隸万象名義』 第 1 帖 67 丁表)



図 10 免

```
<entry xml:id="1_067_A32" type="Regular">
  <form>
    <orth >免</orth>
  </form>
  <hom xml:id="1_067_A32">
    <form>
      <pron type="fanqie">靡蹇反。</pron>
    </form>
    <sense>
      <def xml:id="1_067_A32_sense1">攻也、</def>
    </sense>
    <sense>
      <def xml:id="1_067_A32_sense2">脱也、</def>
    </sense>
    <sense>
      <def xml:id="1_067_A32_sense3">去也、</def>
    </sense>
    <sense>
      <def xml:id="1_067_A32_sense4">歸也、</def>
    </sense>
    <sense>
      <def xml:id="1_067_A32_sense5">自止也。</def>
    </sense>
  </hom>
</entry>
```

・二つ以上の反切

二つ以上の反切については、池田（2020）が精査している⁴。次の九種類の記述形式が存在する：「○○○○反（47 例）」「○○○○○○三反（5 例）」「○○○○二反（83 例）」「○○反○○反（59 例）」「又○○反○○反（1 例）」「○○反…○○反（11 例）」「○○反○○二反（3 例）」「○○反又○○反（5 例）」「○○反…又○○反（7 例）」。

⁴ 『篆隸万象名義』における二つの反切および二つ以上の反切の成因について、池田（2020）は、次の指摘がある：『万象名義』原撰部は、利用した『玉篇』に二反あっても一反のみ採用する方針であった。ところが続撰部の撰者はこれを不十分と考えて、二反を採用する方針で第五帖の本文を整備した。第五帖の撰者はさらに第一帖の補訂作業を進めて『玉篇』で二反ありながら『万象名義』に一反のみの項目に反切を追加して行った。第五帖に「○○○○反」と「○○反○○反」の形式が多いのは、二反を採用するという本文整備の方針が一貫しなかったためで、その後、第一帖の補訂作業を行った際には、「○○○○二反」の形式に整えたのであろう。このような推測が可能である。

例 12 婧 財性子盈二反。竦立也。(『篆隸万象名義』 第 1 帖 73 丁表)



```
<entry xml:id="1_073_A62" type="Regular">
  <form>
    <orth>婧</orth>
  </form>
  <hom xml:id="1_073_A62">
    <form>
      <pron type="fanqie" style="二反">財性子盈二反。</pron>
    </form>
    <sense>
      <def xml:id="1_073_A62_sense1">竦立也。</def>
    </sense>
  </hom>
</entry>
```

図 11 婧

字音を記述する際は、TEI における<pron>タグを使用し、「○○反」または反切の上
下字「○○」と記述するのが一般的である。しかし、『篆隸万象名義』に見られる多様
な記述形式は、この漢字字書の編纂過程に深く関わっている。そのため、これらの内容
を TEI で詳細に記述することが理想的である。

・直音注

上記の反切以外に、「直音注」による字音注記も見られる。形式的に「○音」と示さ
れている項目は約 40 例あり、反切と併用されるケースも多く存在する。この直音注の
注記形式も『篆隸万象名義』の編纂過程に深く関わっているため、<pron>要素の中に
適切な属性を用いて記述していくことが望ましい。

例 13 范 音範。草名。(『篆隸万象名義』 第 4 帖 49 丁裏 艸部)



```
<entry xml:id="4_049_B42" type="Regular">
  <form>
    <orth>范</orth>
  </form>
  <hom xml:id="4_049_B42">
    <form>
      <pron type="zhiyin">音範。</pron>
    </form>
    <sense>
      <def xml:id="4_049_B42_sense1">草名。</def>
    </sense>
  </hom>
</entry>
```

図 12 范

5.4 意味注

『篆隸万象名義』では、主に「○也」のような単字注で字義を注記している。原本『玉篇』では、諸種の原典内容や注釈家による内容を省略し、網羅的に単字注で意味説明を抽出している。さらに、単字注以外にも、漢文節による説明が一部存在する。

・単字注

例 14 課 恪過反。訂也、誠也、第也。(『篆隸万象名義』 第 3 帖 10 丁裏 言部)



図 13 課

```
<entry xml:id="3_010_B21" type="Regular">
  <form>
    <orth>課</orth>
  </form>
  <hom xml:id="3_010_B21">
    <form>
      <pron type="fanqie">恪過反。</pron>
    </form>
    <sense>
      <def xml:id="3_010_B21_sense1">訂也、</def>
    </sense>
    <sense>
      <def xml:id="3_010_B21_sense2">誠也、</def>
    </sense>
    <sense>
      <def xml:id="3_010_B21_sense3">第也。</def>
    </sense>
  </hom>
</entry>
```

・漢文節

例 15 音 猗金反。金石土革絲木匏竹八音。(『篆隸万象名義』 第 3 帖 25 丁表 音部)



図 14 音

```
<entry xml:id="3_025_A51" type="Regular">
  <form>
    <orth>音</orth>
  </form>
  <hom xml:id="3_025_A51">
    <form>
      <pron type="fanqie">猗金反。</pron>
    </form>
    <sense>
      <def xml:id="3_010_B21_sense1" type="Classical Chinese phrase">
        訂也、
      </def>
    </sense>
  </hom>
</entry>
```

5.5 字体注

『篆隸万象名義』では、字体説明の補助として、多くの字体注が注文の中に備えられる。これらの字体注の構造化記述を行う際に、次の2点を留意すべきだと思う。

・字体説明のパターン

『篆隸万象名義』における字体説明には「作○字」「○字」「或○字」「亦○字」のようなパターンがある。これらの字体注の注記形式も『篆隸万象名義』の編纂過程に深く関わっているため、<note>要素の中に適切な属性を用いて記述していくことが望ましい。

例 16 俯 張牛反。誑也、鄣也。或譸字。(『篆隸万象名義』 第1帖 56丁表 人部)



図 15 俯

```
<entry xml:id="1_056_A31" type="Regular">
  <form>
    <orth>俯</orth>
  </form>
  <hom xml:id="1_056_A31">
    <form>
      <pron type="fanqie">張牛反。</pron>
    </form>
    <sense>
      <def xml:id="1_056_A31_sense1">誑也、</def>
    </sense>
    <sense>
      <def xml:id="1_056_A31_sense1">鄣也。</def>
    </sense>
    <note type="variantForm" style="作○字">或譸字。</note>
  </hom>
</entry>
```

・字体注と義注の順番

『篆隸万象名義』における字体注と義注の順番は、時には原本『玉篇』の注文の原貌を反映している。次の例 17「監」では、原本『玉篇』では、先に『説文解字』に関連する「古文監字」(古文の監字である)を提示し、その後に「監」の意味注記、および配属部首の「臥部」を記している。この順番は、『篆隸万象名義』の「監」でも忠実に記録されている。このような字体注と義注の順番も、なるべく記述していくことが望ましい。

例 17 監 古讒反。監字。視也。(『篆隸万象名義』 第3帖 19丁表 言部)



図 16 監

```
<entry xml:id="3_019_A51" type="Regular">
  <form>
    <orth>監</orth>
  </form>
  <hom xml:id="3_019_A51">
    <form>
      <pron type="fanqie">古讒反。</pron>
    </form>
  </hom>
</entry>
```

<note type="variantForm" style="○字">監字。</note>
 <sense>
 <def xml:id="3_019_A51_sense1">鄣也。</def>
 </sense>
 </hom>
 </entry>

6 原本『玉篇』の構造化記述する際の問題点

前述したように、原本『玉篇』の内容はより複雑であり、テキストの校正も定かではないため、その項目構造の分析や関連する研究成果の参照・取り入れが必要である。まずは、構造化記述作業の枠組みを確立することが重要である。この節では、原本『玉篇』の残巻における典型的な長幅な掲出字項目「方」を例に、その項目に関わる典拠名および注釈家名の整理について言及する。



図 17 原本玉篇における「方」の項目

例 18 方 甫芒反。『尚書』：革命和叔，宅朔方。野王案：四方也。『毛詩』：東方未明，西方之人兮是也。又曰：方鳩僞功。孔安國：方，聚見其功也。野王案：當為之曰方，又曰洪水，方割是也。『周易』：后不省方、王弼曰：方，事也。又曰：著之德，圓而神，卦之德，方以智。野王案：『字書』方、架也。『孟子』：不以規矩、不能為方圓是也。『周禮』：王制祿則以方出之。鄭衆曰：以方版書而出之也。杜子春曰：方直謂今時牘也。『毛詩』：江之永不可方思。『傳』曰：方，拊也。野王案：拊，編木以渡水也。又曰：惟鵲有巢、惟鳩方之。『傳』曰：方，有也。又曰：民今殆。『堯』云：方，亡也。又曰：實方實苞。『傳』曰：方、極良也。『堯』云：方，齊也。又曰：既方即阜。『堯』曰：方，房也、謂孚甲始生盡成房也。又曰：萬邦之方、下民之王。『傳』曰：方，則也。『堯』云：方，向也。『左氏傳』：官修其方。杜預曰：方，法術也。又曰：授方任能。杜預曰：百事之宜也。又曰：官不易方。杜預曰：方猶宜也。『考工記』：梓人為侯、廣與崇方。鄭玄曰：方，猶

等也。『儀禮』：履物不足方。鄭玄曰：方猶併也。『論語』：凡謂仁之方也。孔安國曰：方，道也。又曰：遊必有方。鄭玄曰：方，常也。又曰：子路方人。孔安國曰：比方人也。野王案：謂比類譬擬之也。『國語』：方之時動是也。『國語』又曰：不可方物。賈逵曰：方，別也。又曰：晉國之方偏侯也。賈逵曰：方、大也、偏方也。言晉國之大一方甸侯也。『禮記』變成方，謂之音。鄭玄曰：方猶又章也。又曰：子生七年、教之數日与方名。鄭玄曰：方名東西也。『史記』：蒼公因元里，陽公使意盡去其故，方悉以楚方与之。野王案：今處治病之藥方也。『說文』：方，併船也、象兩舟省總聲也。『廣雅』：方，所也、始也。方，正也。方，義也。方，類也。方（後缺）。（原本『玉篇』 卷 18 方部）

五百字程の「方」の項目において、まず反切で字音を示し、次に多くの儒家經典の原文および注釈書の解釈を載せている。さらに、小学書による訓詁釈義を引用し、著者顧野王の案語を付している。異体字の注記や、部首の異なる異体字を参照する注記も加えられることがある。この「方」の項目で確認できるように、原本『玉篇』は出典を明記する字書であり、出典に関わる典拠名や人名等を詳細に記載している。この「方」の項目における典拠名および人名を整理すると、次の通りである（表 1）。

表 1 原本『玉篇』の「方」項目における典拠名・人名

典拠名	人名
『尚書』	野王
『毛詩』	孔安國
『周易』	王弼
『孟子』	鄭衆
『周禮』	杜子春
『傳』	杜預
『箋』	鄭玄
『左氏傳』	賈逵
『考工記』	
『儀禮』	
『論語』	
『國語』	
『禮記』	
『史記』	
『說文』	
『廣雅』	

上記の表 1 で整理して示すように、「方」の項目には、16 種類の典拠名と 8 種類の人名が含まれている。原本『玉篇』の残巻にはさらに多くの出典情報が収録されている。このような出典について整理し、岡田（2022）のモデルを参考にして、<notesStmt>要素で記述する

ことができる。次に、例示的に TEI のデータを示す。

```
<notesStmt>
  <note type="book">『尚書』</note>
</notesStmt>
```

```
<notesStmt>
  <note type="person">野王</note>
</notesStmt>
```

7 おわりに

本稿では、日本に現存する最古の漢字字書『篆隸万象名義』とその先行文献である中国の原本『玉篇』を対象として、その構造化記述における問題点を整理してみた。筆者は学習と理解の範囲内で TEI データを作成したが、まだ整理すべき箇所が多く残っている。特に、TEI データの作成においては、文法的に議論すべき点も多数存在する。構造化記述作業を進める中で、問題点の洗い出しも同時に進めていき、徐々にデータを整備していく予定である。これらの努力がさらなる議論や検討の一助となることを期待している。

附記：本研究は JSPS 科研費 JP21K18013 の助成を受けたものである。

文献資料画像

図 3-16 北海道大学大学院言語科学講座所蔵焼付写真（石塚晴通名誉教授）

図 17 『原本玉篇残卷』顧野王 中華書局 1985

参考文献

池田証壽 「『篆隸万象名義』の和訓と二反同音例」、『国語国文』89 卷 5 号、京都大学文学部国語学国文学研究室 編、pp.1-37、2020 年 5 月。

岡田一祐 「日本平安期古辞書の符号化モデル: TEI をもとにした符号化」、『デジタル・ヒューマニティーズ』vol.2、pp.26-54、2020 年 11 月。

岡田一祐 「日本古辞書の TEI 符号化」、『人文学のためのテキストデータ構築入門: TEI ガイドラインに準拠した取り組みに向けて』、人文情報学研究所監修、石田ほか編、文学通信、pp.206-240、2022 年 7 月。

申雄哲 「図書寮本類聚名義抄の本文解読とデータベース作成の問題点」漢デジ 2016、2016 年 8 月。

申雄哲 「図書寮本『類聚名義抄』の構造化テキストの設計と実践」国際シンポジウム 「古辞書研究の射程」、2018 年 8 月。

- 申雄哲「図書寮本類聚名義抄の基礎的研究」北海道大学大学院博士論文、2015年3月。
- 藤本灯・韓一・高田智和「古辞書の構造化記述の試み：和名類聚抄を例に」日本語学会 2017年度秋季大会、2017年10月。
- 劉冠偉・李媛・鄭門鎬・張馨方・池田証壽「部首分類体日本古辞書の項目構造の多様性に対応したマークアップ・ツールの開発」『人文科学とコンピュータシンポジウム 2017 予稿集』、pp.97-102、2017年12月。
- 李媛「TEI Lex-0 を利用した日本古辞書の構造化記述」『東洋学へのコンピュータ利用 第35回研究セミナー 予稿集』、東アジア人文情報学研究センター、2024年1月。
- 李媛「玉篇系字書の構造化記述に関する TEI マークアップについて」、『東洋学へのコンピュータ利用 第35回研究セミナー 予稿集』、東アジア人文情報学研究センター、pp.13-27、2022年7月。
- 李媛「TEI P5 Dictionaries モジュールに基づく古辞書の構造化記述の試み：篆隸万象名義を中心に」『情報処理学会研究報告』2018-CH-117, no. 5、pp. 1-8、2018年5月。
- 李媛、池田証壽「篆隸万象名義の全文テキストと公開システムについて」人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2016」論文集、pp.95-102、2016年12月。
- 『人文学のためのテキストデータ構築入門：TEI ガイドラインに準拠した取り組みに向けて』、人文情報学研究所監修、石田ほか編、文学通信、pp.206-240、2022年7月。
- TEI Consortium. TEI P5: Guidelines for Electronic Text Encoding and Interchange, Version 4.7.0, revision e5dd73ed0 (16th November 2023) , <https://tei-c.org/release/doc/tei-p5-doc/en/Guidelines.pdf>